

強め、力づけ、揺らぐことがないように

昨年、今年と、お隣りの東海教区の研修会や、修養会の講師を引き受けさせて頂いています。わたしたちの属する日本キリスト教団は北海道から沖縄まで全国を17の教区に分けていて、半田教会は中部教区に属します。この中部教区は富山・石川・福井・岐阜・三重・愛知の6つの県を7つの地区に分けています。そして半田教会は愛知東地区に属しています。東海教区は長野・山梨・静岡の三県ですが教会や信徒の数は中部教区とほぼ同じです。意外に思われるかもしれませんが、これはおそらく幕末から明治期にかけて横浜から入ってきたプロテスタントのキリスト教が東海道沿いに伝道を展開していったために静岡県に教会が多いのです。歴史も古いですね。また中山道ルートですと山梨県を通りますし、長野は宣教師たちの避暑地でした。このように東海教区は交通の要衝を押さえているのですね。

昨年11月の静岡県東部、東静分区というのですが、ここで行われた役員長老研修会の主題は「教会を支える役員のととめ」でした。これにわたしは「一信徒の目線・牧師の目線―」という副題をつけました。来月信州で行われる東海教区婦人研修会は東海教区の宣教基本方針に則って日本基督教団信仰告白から「主の再び来たり給うを待ち望む」という箇所から「終わりに向かう教会」というお題を与えられています。こういう学びのできる教区・地区は強いと思います。聖書から共通の学びをすることで、井戸から水を汲み上げるように、生ける水であるキリストの命にふれる。信仰を生きるのに絶対不可欠なものをいただく。わたしたちが生きているのは基本、キリスト教とは縁のない社会ですから、聖書の教えを通して、神と出会うことがないと、結局、世の中の理によって判断し、生きることになっ

てしまいます。わたしたちに何が約束され、どこを目指して歩めばよいか、永遠の命にいたる道を聖書はきちんと語っています。役員研修会では「信徒の目線・牧師の目線」という副題をつけたと言いましたが、教会に召し集められたわたしたちが、同じ方向を見ていることが大切だと語りました。みなが信じて仰ぐ方向が一致していることです。そのうえで、歩幅はみな違うので、「違った歩幅で一緒に歩く」ことが教会のあるべきかたちではないかと語りました。

それで今朝、わたしたちに与えられている聖書箇所には「長老たちへの勧め」という小見出しがついています。たしかに長老の働きについて触れていますが、それにとどまらず、すべての教会員にあてはまる教えです。ここでいう教会は建物のことを指すのではなく、主に召し集められた群れとして組織化されていく人の集まりを指しています。群れの中に責任をもつ者たちがたてられてゆく。この時代、キリスト教はまだローマ帝国の公認宗教の枠組みに入っていません。ユダヤ教は入っていました。そして、この頃には、ナザレのイエスをキリストと告白して生き始めた者たちは、明らかにユダヤ教とは別の宗教団体であるとローマ側に認識されています。つまり新興宗教扱いで、危険視されている。とくに皇帝崇拝を拒絶していますから反帝国のセクト扱いです。いっぽうのユダヤ教側からも「アナテマ」というのですが、「ナザレのイエスを主と告白する者は呪われよ」と絶縁状を叩きつけられています。母体となったユダヤ教から排斥され、ローマ帝国内に散らばっていったが、いまだ公けに認められる宗教団体ではなく、皇帝を神として拝むこともしなかったために迫害の対象となる。それがこのペテロの手紙の勧めの背景にある彼等の事情でした。こうしたなか長老たちに謙遜であることが勧められています。この謙遜はキリスト教

において特に重要視された徳目です。なぜならそれは主イエス・キリストの生きざまをひと言で表したものだからです。愛ゆえの謙遜を主イエスは生き抜かれた方です。それゆえに、キリストに従うわたしたちにも謙遜を身につけるようにとの勧めがなされます。この場合、大事な点は、人間的な関係の上下によって謙遜の度合いがはかれるのではなく、神さまの前での謙虚さを基準にすることです。もう少し噛み砕くと、ここでへりくだっておくことが得であるとか、社会的な常識を出発点にするのではなく、神の御前でへりくだるのと同じような仕方で人に仕えることです。それがキリストのわたしたちへの仕え方でした。この方は人が人を見るような目で判断し、仕え方のグレードや、重点を変えたりはなさいませんでした。人におもねることをせず、忖度もせず、むしろいと小さき者に心配りをされた方です。わきまえておきたいことです。

次に、思い煩いは、何もかも神にお任せしなさいと勧められます。これは8節以下の、あなたがたの敵である悪魔が、誰かを食い尽くそうとほえたける獅子のように探し回っているのだから、あなたがたは身を慎んで目を覚ましていなさいという勧めにもつながる態度です。苦しみに遭えば誰でも心が萎えます。気落ちします。忍耐の始まりです。いつまで、どうしてという問いがわたしたちを苛みます。この手紙を受け取ったキリスト者たちは、イエス様を救い主と信じて生きているために蒙らなければならなかった不利益や、苦難がありました。理解されず、それどころか誤解され、避けられ、白い目を向けられる日々、そうした人々の視線に打ち勝つには、彼ら自身がキリスト・イエスの教えにしっかり留まって互いに愛し合う群れを作ってゆく、この世からは出て来ない神の国の消息に根ざした生き方を、置かれた場所で築き上げてゆく道しかなかった。出る杭は打た

れるということわざが日本にはありますが、どこでも似たようなものです。人と違った生き方を志せば摩擦は必ず生じます。しかし、その目的とするところが他者に対する謙遜な態度や、思い煩いに一喜一憂することのない不思議な生き方に収まってゆくなれば人々の見方も変わります。迫害を受けても、わたしのために罪と死の支配を打ち破ってくださったキリスト・イエスを贈ってくださった神の恵み深さを知るゆえに慌てない。わたしのことを、わたしに勝って、心にかけて下さる神がおられることを、わたしたちは知らされています。だから、思い煩いはすべて神に委ねなさい、と勧めるのです。英語の聖書ですと、この箇所、委ねるというよりも、投げろ、投げ捨てろ、という意味の単語が使っており、なるほどと思わされました。委ねるといふとなにかとても丁寧で、逆に、もたもたと自分のなかでああでもない、こうでもないとスローな感じがしますが、ここは思い切って投げ捨てろ、重荷は神に放れ！という勢いがあって教えられました。そうすることで、事柄が神の支配する領域のなかに移される。それが主の平安に生かされる道でしょう。わたしたちの見聞きする現実には直接的・間接的にわたしたちを弱らせます。この手紙ではそれを悪魔の試練と表現しています。悪魔というと現代人は首をかしげそうです。しかし悪魔の存在は疑えても、この世界に満ちる悪の現実を誰も否定できません。リアルな脅威として他者を害する悪がさまざまなかたちを取ってわたしたちのまわりを闊歩しています。まさに獲物を探すライオンのようにです。ペテロの書いていることは、わたしたちの現実と地続きです。決して無縁なものではありません。それをこの時代はこのように表現したのです。教会学校通信にもすこし書きましたが、悪魔は実体をもたない霊的な存在で、人間を誘惑し、心にささやきかけるもの、神の枠組みの中に生きる

人間をそこから離反させようと様々に試みる存在です。そして悪魔は試練や苦しみを通して、たとえばヨブ記のヨブのように災いや病を通して、その結果から、神の存在を疑わせ、神の愛による支配のもとから、人間を奪い取ろうとします。そして、神に背を向けたという事実そのものを今度はわたしたちに突きつけ、そのようなお前はもう救われないと良心を抉るのです。サブカルチャーで描かれるような実体をもった様々な悪魔の姿かたちを思い浮かべることにあまり意味はありませんが、聖書が「悪魔」と名指ししたような霊の働きがあることは確かだとこの世界に満ちる悪の結果から考えています。これに対してはペテロの言うように隙きを見せないのが一番安全ですが、わたしたちは脇が甘いですから、しばしばつけ入るような隙きを与えてしまうこともあるように思います。わたしたちの行いが神を悲しませることはもちろんですが、それによって神がわたしたちを見捨てるということはありません。十字架のキリストの恵みを信じて、どんな場合でも悔い改めて歩み始めることが大切です。何よりもペテロが語るように「あらゆる恵みの源である神、すなわち、キリスト・イエスを通して、あなたがたを永遠の栄光へと招いて下さった神ご自身が、しばらくの間、苦しんだあなたがたを完全な者とし、強め、力づけ、揺らぐことがないようにして下さる」と約束して下さっています。神の招きには、かならず神の祝福が先んじるものですから、わたしたちは苦難の中にあっても、仮に罪に落ちることがあったとしても、キリストを贖い主として下さった神の真実に身を委ねて、終わりの日の神さまによる完成を待ち望んで歩みたいと願うものです。苦しみがあるのはそこでわたしたちが神の言葉の力を知るためであり、神の恵み深さを味わうためであることをわきまえておきたい。ペテロが言うように、神さまご自身が、

この世にある様々な苦しみを通して、わたしたちを完全なものにしようとしておられるのです。そこでわたしたちが神を頼みとし、神に返り、生きようとするか。それとも己の力に頼り、サタンの誘惑にひかれて神のご支配のもとから離れ、失われてゆくのか。そこに日々のわたしたちの戦いの場があるのです。信仰にしっかりと踏みとどまって歩むためにも、神の言葉を共に聴き、賛美をする礼拝というわたしたちに与えられた恵みの場、共同の祈りのときを大切にしたいと思います。

お祈りいたします。